

絵本から広がる幸せ

被災地へ贈るキャンペーン

いわむらかずおさん
寄せる思い イラストに

毎日新聞社と財団法人大阪国際児童文学館などは、東日本大震災で被災した子どもたちに本を贈る「いっしょだよ」キャンペーンを展開している。自らも被災した栃木県在住の絵本作家、いわむらかずおさん(72)が、キャンペーンのためのイラストを寄せてくれた。いわむらかずおさんの震災に対する思いとは。

【反橋希美、写真も】

「これから大好きな本を読みに行くよー!」。本を片手に歩く10匹のネズミの子たちからは、そんな声が聞こえてきそうだ。イラストは、850万部を超える「14ひき」シリーズ(童心



「絵本には人の心に触れるものがある」と語るいわむらかずおさん。絵本の丘美術館で「いわむらかずおさんがキャンペーンに寄せたイラスト」



図書購入費 お寄せください

キャンペーンは他に、大阪府書店商業組合と毎日新聞東京・大阪・西部社会事業団が主催。一定の寄付金が集まれば学校、保育園など配布先を募集する。児童書の専門家が配布先の要望や子どもの年齢を考慮し本を選んで購入。保護カバーをかけて贈る。

4団体は、阪神大震災でも同様の取り組みを行った。当時もかかわった大阪国際児童文学館の土居安子・主任専門員は「空想の楽しさや人との交流の温かさが伝わる本を選びたい」と話す。寄付金は郵便振替で。口座は毎日新聞大阪社会事業団(00970・9・12891)。通信欄に「子どもの本」と明記を。問い合わせは、同文学館「東日本大震災『いっしょだよ』キャンペーン」事務局(06・6744・0581)まで。

社)の子どもたち。「絵本を開くとふわっと幸せが広がる。だから大事に抱えているでしょ」とほほ笑む。

あの日。栃木県那珂川町にある「いわむらかずお絵本の丘美術館」隣のアトリエにいた。「これでもかと揺さぶられ、恐ろしい自然の『意思』を感じた」。同

県益子町の自宅は水道管が壊れ、約10日間、近くの三男宅へ。居間で7人が体を寄せ合い、眠った。

「14ひき」では、10匹の子と父母、祖父母が、力を合わせて暮らしている。「お風呂に入って、歯磨きして寝る。さいなことが、いかに幸せか。生きることの基本を描きたかった」

背景には戦争で約1年半、両親と離れて疎開していた幼児期がある。不安でたまらなかった半面、小川

で魚を捕まえたり、ナツメの実を拾って食べた記憶も。被災した子どもには「つらいことがいっぱいあるけど、幸せも見つけて元気を出してほしい」と願う。

休館していた美術館は4月20日に再開。「自然を体感できるように」と草原や農園を備えた丘にウグイスが鳴き、ヒメオドリコソウが咲く。だがこの約100キロ先で、福島第一原発が放射性物質を出している。いわむらかずおさんは「絵本を通して大切なものは何か伝えたい」と静かに語った。